

事 務 局 よ り

冬来りなば春遠からじ、と申しますが、その言葉の通り
厳しい寒さを心配しておりましたこの冬も割合あたたかく
すぎて、いよいよ待望の春を迎えることになりました。

仰ぐ陽の色も何となく明るく、見るものすべてに生色が
よみがえったように感じられます。萌え出る若草、ふくら
む木の芽、花ももうすぐです。

会員の皆様には益々お元気で各方面にご活躍のことと拝
察いたします。

みやま文庫もおかげ様でいよいよ健かに順調な歩みをつ
づけており、郷土群馬のため、又会員の皆様のためにも、
よりよい成果を挙げようと努力しております。会員の皆様
におかれましてもよろしくご支援ご協力下さいますようお
願い申し上げます。

さて本年度もすでに三冊の本をお手もとに届けましたが
この度第四回配本「群馬の短歌集」が出来ましたのでお届け
いたします。これは前にも申し上げました通り、みやま
文庫賞作品でありまして、群馬町金古の神保冷平氏の著作
になるもので、戦前篇となっております。

次に四十八年度の出版予定ですが次の通りになっており
ます。

群馬の俳句歳時記 群馬の植物
雷とからっ風 先史遺跡

◆ 会員の継続について

会員の方には四十八年度も引きつづき会員としてご協力
いただき度いのですが、若し止むを得ない事情で退会なさ
りたい方は、五月末までに必ずはがき又は電話等によりそ
の旨当事務局までご連絡下さい。そのご連絡がない方は引
きつづき会員としてご協力下さるものとして処理したいと
存じますのでご了承下さい。

◆ 会費の払い込みについて

会費はその年度のはじめ（六月末日まで）納入して
いただくことになっておりますので、お忘れなくよろしくお願
い申し上げます。方法は事務局まで直接持参又は振替貯
金、現金書留等何れの方法でも結構ですが期限は是非共守
っていただきたいと存じます。金額は昨年と同じで一八〇
〇円、郵送の方は二二〇〇円です。

尚新入会員も歓迎いたします。どうぞ次へお申し込み下
さい。

前橋市城東町二丁目三の三
群馬県立図書館内

みやま文庫事務局

電話前橋二局三二〇八番
振替東京 一四二五九番



みやま文庫

会 報

No. 2 1

48. 3. 1

事務局長二年目の弁

関 俊 治

県立図書館に勤めるようになり、関東ブロックの県立図
書館長会議などに出席したりすると、よく「あなたのところ
でやっている みやま文庫は いい仕事ですね。」とほ
められたり、羨ましがられたりして、面目をほこすこと
があるが、半面 私はそう言われた途端にむしろ恐縮して
しまう場合が多い。ということは、私が、いま「みやま文
庫」のスタッフの一員として名をつらねているのは、なま
た県立図書館長の職に在るからで、いわば偶然さうい
ふようになった、ということだからである。私の先輩の歴代
の館長も、みやま文庫事務局長という肩書を仰せつかった
とき、いずれもさういふ戸惑いを感じ、内心忸怩たるもの

があったにちがいない。もっとも、私の場合、みやま文庫
には、以前からつがずはなれずといった関係にあった。と
くに県の社会教育課で文化関係の係にしばらくいたので、
この文庫の幹事を命じられたりしたことがあつたが、この場
合は、ほんとうに末席を汚していたにすぎない。この事業
をここまで仕上げてきたのは、なんといっても、初代運営
委員長であり前運営委員長であつた古屋原県議会議長、相
葉編集委員長、萩原理事長（前橋市立図書館長）などの先
輩の皆さんの御力であつたことは、ここにあらためて言う
までもないことである。すでに十年をこえる歴史をもち、
やがて五十号に達する輝かしい成果をあげようとしている
本文庫のことを思ふと、私は、この職にあることの責任を
痛感せざるを得ない。

重ねて私事にわたり恐縮だが、私には、自分の本を出し

たという経験がない。もう長い間、あちこちに雑文を書きつづけているが、一つとして本にまとめられるような作品はないので、おそらく、一生、雑文の書きつばなしで終わってしまうのではないかと、思っている。しかし、雑文また愉^{たの}しである。雑文は、私の乱読、多趣味に基づくものであり、同時にそれは、私の不勉強ともぐさを証明するようなものである。私の物覚えの悪さと系統も秩序もない読書は、私をして、科学的に綿密に考証を重ねて論究してゆくというよな文章の立て方を忘れさせ、気ままに想の趣くままに文章を展開するという、いわば安易な道を辿らせることとなったのである。私の書いたものを、人はよく、「隨筆でもないし、評論でもないし、一体、なんて称んだらいいのか」と言う。そういう襍^ざのよな文章を書き綴っている私が、それをまとめて本にするなどということは、これからもあり得ないことだ。それゆえに、私は、みやま文庫に、長年積み重ねた研究の成果を、丹念に、しかも読みやすい文章を、発表していただいている人たちに、ほんとうに頭の下る思いである。中には一つの事象について終生をそれに打ちこんだという力作もあり、それがまた本文庫の魅力であり、価値でもあるわけだが、私は、こういう論文に対して、はげしい羨望と敬意を感ずる。この文庫

が、会員三千人の支持を得ているのも、こういうひたむきな研究者の労作が活字になること、またそういう研究に照明をあてるための、立庫のスタッフの努力があったればこそである。

前に記したとおり、「みやま文庫」の名は県外にひろく知れわたっている。群馬県は出版事業の育たぬ地方、というこで定評があった。そういうシンクスを、「みやま文庫」がみごとに破った。とまで言われている。たしかに、この事業は、本県の誇りであり、そういう意味でも、いつまでも会員の支持を得ながら、本県の文化の真の土壌となるようないい仕事を続けてゆかなければならない。

会員の皆さんからも絶えざる叱咤激励と、企画へのよきアドバイスを与えてくださるよう、心から願う次第である。

(みやま文庫事務局長、県立図書館長)

◆みやま文庫原稿募集について

当文庫に於てはさきにみやま文庫発足十周年を記念してみやま文庫の原稿を懸賞募集しましたが本年も引きつづき次の規定により実施いたします。就きましては着て多数ご応募下さいようお願い申し上げます。

第4回みやま文庫懸賞原稿募集

◎ 応募規定

- (一) 応募原稿
 - (1) 郷土群馬に関する未発表の著作(みやま文庫に向くもの)
 - (2) 内容は高等学校卒業程度の学力で理解できるもの。当用漢字、新かなづかいを原則とする。
 - (3) 執筆は個人でもグループでもよい。
- (二) 応募資格 みやま文庫会員(応募の際入会可)
- (三) 締切り期日 昭和48年9月30日
- (四) 宛 前橋市域東町2の3の3 群馬県立図書館内

みやま文庫事務局

電話 前橋 31 — 3008

(五) 入賞 みやま文庫賞 一編 賞金六万円

(みやま文庫として刊行する)

佳作 若干名 賞金各一万円

(みやま文庫として刊行することもある)

(六) 枚数 400字詰原稿用紙(300枚~350枚)

(七) 選考 みやま文庫賞選考委員会

(八) その他

入賞作品を刊行する場合は編集委員会で加除訂正を求めめることもある。

(以上)